

登山評論家
無名山塾主宰

岩崎元郎さん

日本には四季折々の美しい自然があります。
その代表的なものが山であり、山の自然に親しむことは
豊かな人生を送ることにつながるのではないのでしょうか。
山の魅力、登山の楽しみ方について、
中高年登山者のカリスマ岩崎元郎さんに、お話を伺いました。

人生は山登りとともに
山はいつでも元気にしてくれる



——岩崎さんはいつ、どのようなきっかけで山登りを始められたのですか。

僕は昭和20年生まれですが、戦後間もない頃で遊びと言ってもたいしたものではなく、クラブ活動がメインという時代でした。中学1年のとき、背が高くなるというのでバスケットボール部に入ったのですが、望み叶わなかったことがわかり、すぐにやめてしまいました。その頃、剣道漫画の『赤胴鈴之助』が少年雑誌に連載中で、その影響で今度は剣道部に入ったのですが、背が低いから後頭部に竹刀が入ってすごく痛いし、強くもなれない。中学2年まで続けたのですが、結局嫌になり、こちらもやめてしまいました。

それで次に入ったのが卓球部です。当時、日本は卓球が世界一だったので、その影響を受けました。こちらはピンポンレベルから卓球と言えるレベルくらいまでは上達したのですが、背が高くないとネット際に落ちる球なんかは拾えませんか。だから、強くなっても限界があります。

在学していた駒場東邦は中高一貫教育だ

PROFILE

【いわさき もとお】 1945年東京都品川区大井町生まれ。63年から69年まで昭和山岳会在籍、登山の基本を学ぶ。70年に登山会同人を創立、沢登り、岩登り、雪山登山に親しむ。81年春、ネパールヒマラヤのニルギリサウス峰登山隊長を務める。同年、無名山塾を設立、登山者育成のための登山学校活動を開始した。95年～99年、NHK教育テレビ『中高年のための登山学』が評判となり、熟年世代を中心にした登山ブームを巻き起こす一方、安易な登山への警鐘も鳴らす。現在、文藝春秋で『悠々山歩き』連載中。『山登りを始めたら読む本』『ぼくの新日本百名山』『日本登山体系』など登山に関する編著書多数。日本登山インストラクターズ協会理事長。ホームページ「月間岩崎登山新聞」
<http://www.iwasaki-motoo.com/>

ったので、そのまま高校に持ち上がり、卓球部も一応やめずにいたのですが、全くと言っていいほど熱は入っていませんでした。

——いろいろチャレンジをされても、いま一つのめり込めなかったんですね。

そうなんです。高校1年の秋、ボーイスカウトに入っていたクラスメイトから誘われて、河口湖へキャンプに行きました。それまで、保護者と一緒にキャンプに行ったことはありませんでしたが、自分たちだけのアウトドアは初めての経験でした。と言っても、そのときの服装は、普段着で、靴はバスケットシューズでした。富士急行線に乗って帰る途中、三つ峠という駅に到着したとき、5～6人の登山者がドドツと入ってきて、何だかすごい人たちに思えました。今から言えば、単なるハイキングの人だったんですけど、その登山者の足元が鮮やかなブルーのキャラバンシューズで、それに心を奪われました。

昔の登山靴は非常にハードですから、何日も歩いたら、足が痛くなつたんです。そこで注目されたのが、ヒマラヤ山脈に属するマナスル登山のために開発されたキャラバンシューズでした。このキャラバンシューズが登山界に大ブレイクしていて、僕もこういう靴を履いて山に登ってみたいと子ども心に思

いましてね。叔父がやっていた会社でアルパイトをして、お金を貯めて、キャラバンシューズを買い、そこから山登りを始めました。——キャラバンシューズがきっかけだったとは、驚きました。それで、高校の登山部に入部されたのですか。

それが違うんですよ。僕はガキ大将的な性分で、連れていってもらおうというのが意に沿わないんです。山登りしたいからといって山岳部に入っても途中入部なわけですから、体育会系のしきたりで同級生の下になつてしまいます。それは気に入らないので、自分で山のサークルをつくってしまおうと思いました。そこでつくったのが「駒場東邦ワンダーフォーゲル部」です。

上級生が入ってくると威張られてしまうので、入部対象は同級生以下ということにして中1から高1まで全クラスを回ってピラをまき、30人くらい集めました。同好会ですけど、ちゃんと「駒場東邦ワンダーフォーゲル部設立趣意書」もつくりましたよ。

——それで本格的に活動を開始されたわけですね。

はい。最初のゴールデンウィークに、高校生は丹沢の縦走、中学生は奥多摩の川苔山から注ぎ込んでくる支流の入川谷という

登山者の鮮やかなブルーの
キャラバンシューズに心を奪われました。

山登りには、生きているという実感が すごくあります。人生をちゃんと クリエイトしている感覚です。

川原で飯盒炊きをする計画を立てたところ、「中学生だけでそんなところに行かせるのはいかなものか」と周囲の大人たちから意見が出ました。それで「僕たち高校生グループのうち2人が、中学生の設営までは見届けます」と言ったら許可が下り、実施することができました。

入川谷での設営を終え中学生グループと分かれた後、ガイドブックを見よう見まねで、舟井戸^{ふないど}という川苔山への登山コースに進みました。でも、2人きりになるとすごく心細いわけですよ。高尾山^{たかおさん}（東京都八王子市にある山で、標高は599m）のような一般コースではないですから、周囲には人影もない。心細さのあまり、舟井戸にあった営林署の小屋に飛び込みました。

そこに早稲田大学のお兄さんたちが5人いて、「君たち、どこへ行くの」と聞かれ、「2泊か3泊して、雲取山^{くもとりやま}まで行く」と答えました。雲取山は東京都の最高峰ですからね、計画は大きいのですよ。お兄さんたちにも「すごいね」と言われました。それで「お兄さんたちはどこへ行くのですか」と尋ねると「僕たちは天祖山^{てんそさん}だよ」と。

その天祖山コースは、僕たちが行こうとしていた雲取山の半分くらいの距離にあり、奥多摩に戻るコースです。だから、2日ほど日程も短縮され、次の日に泊まれば、その翌日には山を下れます。とにかく心細いし、しっかりしたお兄さんたちがいるから「連れていってください」とお願いしました（笑）。



「僕たち、天祖山までしか行かないよ」と返されましたが、「いいです。いいです」と言って、結局、お兄さんたちにくっついて天祖山に行つて帰ってきました。それが僕の山登りの原点です。

—— 計画通りにいかなかったのが原点だとは、意外ですね。その後、岩崎さんは山登りを極め、登山評論家として活躍されていますが、山登りがつらくてやめようと思つたことはありませんでしたか。

山登りのときのあの心細さを経験する度に「もう山はやめよう」と思うのですが、戻ってきて1週間、1カ月と経つてくると無性に行きたくなるんです。やはり非日常

の世界の魅力ですね。

絶対安全なんていう保障はないし、サバイバルゲームではないですが、とにかく自分の力だけで、ちゃんと安全圏に抜け出さなければいけないのです。自分から非日常の世界を求めて飛び込んで、もがいて脱出してくるのです。でも、その分、生きているという実感がすごくあります。自分の人生をちゃんとクリエイトしているという感覚です。

誰かに連れていかれるのではなく、自ら山登りを始めたので、本当にはまり込んだというか、これしかないという感じでした。バスケットはダメ、剣道もダメ、卓球もダメで、山と出会い、そこに自分の居場所を見つけま

した。昭和35年、僕が15歳のときに出会って、もう53年目になります。

——その後は、どのような活動をしてこられたのですか。

高校時代は自己流で登っていたのですが、やはり本格的な登山は自己流では無理です。東京理科大学に進学してすぐ体育会山岳部のガイダンスを聞きに行ったら、剣岳で遭難し行方不明になった仲間たちを発見するまでは、搜索活動がメインの活動になると言うんですよ。入部して早々、搜索活動というのは、ちよつと嫌じゃないですか。それで、高校時代の山岳部の先輩が入っていた社会人団体の昭和山岳会に入ることになりました。

昭和山岳会に入ると、さつそく本格的な登山を開始しました。大学1〜2年の頃の僕はウエストが60cmちよつとしかなくて、体重も38kgくらいしかありませんでした。それなのに、30kgもある荷物を背負うわけです。「キスリング」というデカイザックに、一斗缶を2本ずつ2段に重ねられて、本当にもう足も出ないし、べそをかきながら登っていました。

18歳でまだ新人でしたからね。帰ってきたらもうやめようと思いいながら、行きの電車に乗っていた記憶があるくらいなのに、登る

とその山の素晴らしさに魅せられて、結局また行きたくなるのです。

——昭和山岳会は、レベルの高い登山家の会だったのですか。

そうですね、一流の人たちが先輩にいました。姿を見て学べというスタンスではなく、積極的にいろんなことを教えてくれましたので、とてもいい勉強になりました。昭和山岳会という日本でも一流のうちに数えられる山岳会に入ったおかげで、先輩には恵まれたと思っています。

そのような環境の中で登山の基本を勉強したわけです。個人で行った山だったら30kgの荷物なんてすぐ放り出してやめてしまうところを、会の合宿だから、先輩たちもいい意味でしごいてくれるし、こつちとしても頑張らなければいけませんよね。

その頑張りの最たるものが御岳駅（東京にあるJR青梅線の駅）からの山登りです。「カモシカ山行」と呼ばれるトレーニングで、24時間、寝ずに歩くというものです。

——24時間ですか！

夜10時に御岳駅で電車を降り、そこからすぐに歩き始めます。御岳、大岳、御前山あたりで夜が明けて三頭山に立ち、今度は笹尾根を下って、和田峠から陣馬山に登り

返す。そのあたりで日が暮れて、高尾山を越え、甲州街道に下りて、JR中央線の高尾駅まで歩いて24時間。最後にはあまりにも足が痛過ぎて、登山靴を脱いで靴下になって、アスファルトの道をベタベタ歩いたくらい。そのカモシカ山行を18歳と19歳の2回達成しましたね。先輩がフォローしてくれたとはいえ、その経験はすごく自信になりました。

——確かに、その達成感は自信につながりそうですね。

はい。それに、冬合宿のために雪上訓練も行いました。

——冬のトレーニングメニューも別にあるのですか。

そうですね。11月下旬の連休期間中、ほとんど毎年というくらい、富士山の5合目、6合目あたりで雪上訓練の合宿をしていました。

そんなことで6年間、昭和山岳会で修業しましたが、だいたい山が見えるようになってくると、もうちよつと自分らしい山登りをしたいなという思いが募ってきたこともあって退会し、その後「蒼山会」という山岳会を自分でつくりました。

——やはり、ガキ大将の性分がうずいたのでしょうか。

そうかもしれませんね。でも、僕が今日あるのは昭和山岳会のおかげだと思っていますよ。だから、その後文章を書くようになってからも、必ず「昭和山岳会のおかげ」と書いています。

先輩がフォローしてくれたとはいえ、経験が自信につながりました。

山の技術をちゃんと伝えていきたいという思いで無名山塾をつくりました。

一方、私がつくった蒼山会のほうは、同人会というスタイルにして「好きなやつは自由に来いよ」としたところ、とても先鋭的な人たちが入ってきましてね。もともと上級者というわけではなく、切磋琢磨していくうちにレベルアップして、登山界の中につくさびを打てたかなという感じがします。

蒼山会から3人、友好団体の東京心岳会から3人、計6人のメンバーでネパールに挑戦したのですが、帰国すると今度は登山学校みたいなものが必要だと思い、無名山塾を立ち上げ、蒼山会は後輩に任せました。

無名山塾は登山学校というスタンスで、山の技術を若い人たちにもちゃんと伝えていきたいという思いでつくりました。

若い頃は自分が山に登ることが中心でした。南アルプスの沢登りだとか、あちこちの未踏の岩壁を登ったり、鹿島槍ヶ岳^{かしまやりがたけ}岳荒沢奥壁に自分のルートをつくるとか、そういうすぐ先鋭的な山登りに夢中でした。わかりやすく言えば、命懸けの山登りをやっていたのです。その一つの象徴が、1981年にネパール、ヒマラヤのニルギリサウス峰へのチャレンジです。成功はしませんでした、チャレンジしただけでも意義はあったと思います。

——そうだったんですか。

その経験があつて、無名山塾につながりました。無名山塾は「山塾」つまり山の学校という意味なのですが、1981年当時の登山界の中で、僕は登山学校の必要性を強く感じていました。登山学校とは言っても寺子屋的なもので、当初は本当に無名だったのですが、一生懸命活動していたら、いつの間にか結構有名な寺子屋になりました。

無料で借りられる定員30人の会議室で最初は3人くらいしか来なかったのが、10人、20人、30人と増えていつて入りきれなくなり、今度は定員60人の会議室を借りてもすぐにいっぱいになって、ついには100人……とどんどん増えていきましたね。

——無名山塾はどのような教えなのですか。

一人前になったら、あとは自分たちで登りなさいというのが無名山塾の考え方です。

昔、僕らが先輩に岩登りを教えてもらったときは無料でした。代わりに僕たちは朝3時に起きて飯を炊くとか、荷物を背負うとか、あるいは夜10時の夜行列車の座席を確保するために何時間も前に行つて場所を取つておくというように、労働で返しました。

それに対して、無名山塾はきちんと講習費を取っています。というのも、初心者講習に來たときに無料だと取り組む姿勢が甘くなつてしまうからです。無料だからいいやとなつて、結局、続かなかつたりします。

——確かに、お金を払ったほうが真剣になれますね。

無名山塾では2年間、本科生としていろいろな勉強をします。本科生の間は講習会が有料で、一定のレベルに達すると研究生として登録されます。研究生になればあとは自分で技術を磨いていつてもらい、ある一定の技術を身につけると「同人」となるわけです。昨年の夏も、そうやって育ってきた同人のメンバーが3人、マッキンリーに登ってきました。

同人と呼べるのは、岩登りや沢登りを一通りちゃんとできて、他の人にも教えられる人です。その同人の中から何名かは無名山塾の講師を務めてもらっています。

また、日本百名山など一般登山道から登れるピークハント（山頂のみ目指す登り方）やハイキングを楽しむことが目的の「遠足倶楽部」というものもあります。メンバーは中年の女性が多く、男性は少数派で、最盛期には600人くらいいました。

——現在、無名山塾全体でどのくらいいらっしゃるのですか。

本科生と研究生、同人が40〜50人くらいで、遠足倶楽部のメンバーが200人ちょっとくらいです。昔は僕のところ以外に登山学校がありませんでしたが、今はいくつもできましたから。

——岩崎さんは山登りの講師として、多くの日本の登山愛好家たちとともに海外にも同行されていますね。毎年、どのくらい行かれているのですか。

だいたい年間10回くらいです。飛行機に

空になっている状態のときに 素晴らしい生命エネルギーが 注入されています。



キリマンジャロ頂上、ウフルピークに立つ岩崎さん

乗るのも疲れますので、なるべく若いうちに
行っておこうと思つています。と言つてもも
う若くはないんですが（笑）、ほぼ月1回の
ペースで行つていますよ。今の時期は夏を迎
えた南半球の山に登っています。山登りの
レベルは遠足倶楽部くらいで、参加者は10
〜20人くらいです。南アフリカの喜望峰や
韓国の釜山周辺、タスマニアなど世界各地
で山登りの魅力を伝えていきます。

——山の魅力について、ズバリお聞かせく
ださい。

僕が『沢登りの本』を出したときに、い
ろいろな方が読んで電話をかけてきてくれ
たのですが、そのうちの一人が瞑想家の方でし
た。一緒に沢登りをしたり親しく付き合う
ようになったのですが、あるとき「岩崎さん、
何で山に登ると思う？」という質問をされ
ました。「そこに山があるから」なんて答え



チーフガイドから登頂証明書を貰う岩崎さん

でも仕方ありませんから、僕が「質問の
意図がちよつと分からないのですが」と返す
と「岩崎さん、山というのは山岳禅定の世
界ですよ」とおっしゃるのです。一心不乱に
なつて山に登っていると、ふつと無になる瞬
間があるのですが、その瞬間こそ素晴らしい
生命のエネルギーが注入されていると。

人間には常に自意識や自我が働いていま
す。今この瞬間も、僕にしても皆さんにし
ても、自意識や自我が働いて、一生懸命や
つていくわけですね。でも、一生懸命やつ
ている間というのは、実は生命エネルギーを
消耗しています。そして、消耗したエネルギ
ーがどういうときに補充されるかというと、
無我、無意識のときであるということです。
無我、無意識の一つは健康な熟睡です。
ですが、この現代社会で健康な熟睡なんて
そうそう得られようがないじゃないですか。

そういう中で、座禅を組んだり瞑想したり
することで、無我、無意識の状態を得られ
るということです。

——なるほど。

その瞑想や座禅と同質のものが山登りに
あるそうです。ハアハア、ゼエゼエながら
登つてるとき、最初は「苦しいな、来な
きやよかつたな」とか、「あいつにだまされた」
とか、いろいろなことが頭の中を巡つても、
そのうち全部消えてしまいます。消えている
時間が1秒なのか1分なのかよく分かりま
せんが、その瞑想家の方の話を聞いて僕も
「ああ、そうだ」と納得しました。

一生懸命山に登つていてふつと我に返る
瞬間、登つているときは覚醒しているから、
木の根っこがあればちゃんとまたいでいるし、
声を掛けられれば返事もします。でも、あ
る瞬間、無我、無意識の状態になつていて、
それで「あれ？俺、何してたのかな」な
んて歩きながら思う瞬間があつて、その、空
になつている状態のときに素晴らしい生命エ
ネルギーが注入されているそうです。

例えば、初心者が山登りをして、翌日、
足がパンパンになるほど身体的には疲労し切
つていても、気持ちはすくく充実していて、
「矢でも鉄砲でも持つて来い」というような
気分で見られるのは、山登りで空の時間を
持つて、生命エネルギーが補充されているか
らだそうです。ですから、どんなに苦しくて
も、つらい思いをしようとも、やはり山は素
晴らしいと思つて、みんな山に帰っていく。

山登りの初心者からベテランまで
楽しめる岩崎さんの著書



そのあたりに、山の魅力があるのではないかと
思いますね。

——山登りには、人を元気にするエネルギー
があるという考え方は興味深いですね。
読者の中には、これから山登りを始めてみ
たいという方もいらっしゃるかもしれませんが
が、岩崎さんが今まで行かれた山で「一生
に一度は登ったほうがいい」という山があ
れば、教えていただけますか。

おすすめこまの山はたくさんありますね。甲斐
駒ヶ岳は僕が16歳のときに初めて登ったアル
プスの山です。この甲斐駒ヶ岳には、ぜひ
登ってほしいですし、鹿島槍ヶ岳というのは、
僕がルート開拓した岩壁がある山で、ここ
らもおすすめです。北アルプスよりちよつと
離れたところにある雨飾山は、名前もいい

親父と妹と一緒に富士山に登って、
頂上で見た日の出は、
目に焼き付いています。

ですし、温泉もあってぜひ登ってほしいです。
そうやって考えていくと、一つを選ぶとい
うのはなかなか難しいですね。

——富士山はいかがですか。

僕は高校3年のときに登って以来、富士
山には何回も登っていますが、初めて登った
ときの富士山はまだまだにはつきり覚えていま
すね。親父と妹と一緒に登って、頂上で夜
明けを待っているときに見た日の出は、目に
焼き付いています。

太陽が昇る直前、まず眼下に広がる雲海
が紫色に染まって、次にオレンジ色になつて、
太陽の陽差しがパアツと差し込んでくると、
空が燃えるように赤くなるんです。あの光景
は本当に素晴らしい。お天気という条件
がよくなければ見られませんが、あれは富士
山以外では見られないと思います。

——そういう話を聞くと、一生に一度くら
いは富士山に登ってみたいですね。

ところで、当協会ではライフプランを充
実させるために生きがいを持つことが大切だ
と考えています。そこで、岩崎さんに山登
りと生きがいについてお聞かせいただけま
せんでしょうか。

あるがん患者の団体から依頼を受けて、

一緒に山に登ったことがあります。そのとき、
こんな話を聞きました。あるがん患者の方が
友だちから「そんなに先が長くないのなら、
好きなことをやったらいい。一緒に山に行こ
う」と誘われたそうです。それからというも
の、山登りに目覚め、その後「残り少ない
人生は山登りを楽しもう」と一生懸命山登
りを続けているうちに、いつの間にか10年経
っていたというのです。

このエピソードは、山登りががんに効いた
ということではなく、山登りという生きがい
を見つけたことが重要だったのではないでし
ょうか。似たような話は別のところでも聞い
たことがあります。そう考えると、山登りに
限らず、生きがいを持つことは大事だと思
いますね。

——全くその通りです。生きがいの一つと
もなり得る登山ですが、山ガールの増加など、
今、老若男女を問わず山登りがブームとな
っています。そこで、山登りの計画と準備、
注意点などのアドバイスをお願いします。

そうですね。まず、道具についてはそろえ
るときにはいいものを買いたくというこ
とです。靴だったら3万円前後のもの、レ
インウェアだったらちよつと値段は張ります

そのときどきに合わせて、 自分で判断できなければいけません。

が、上下で4万円前後のゴアテックス素材がいいでしょう。ザックは1万円前後でも充分だと思えますが、それでも全部そろえると10万円ほどかかります。安い買い物じゃありませんが、きちんとした道具をそろえておく
と長く続けられるんですよ。

例えば、山に行つて雨が降ったりすると来なければよかったと思うけれど、10万円の道具を買ってしまったと、簡単にやめられない。もったいないから2回、3回くらいではやめられないわけです。それで、4回、5回と行っているうちに必ず「来てよかった」という場面が出てきます。

せっかく山はいいなと思つても、安い靴だと足が痛くなります。そこで、山に行くためにいい靴を買い直す。足が痛くなる靴は二度と履きませんから、1万円で買っていたとしたら、その1万円分損してしまいます。そう考えると、最初からちゃんとしたものを買つておけばよかったとなるわけです。

服装については、そのときどきにに応じて、自分で判断できるようになることが大切です。転んだときになるべくケガをしないようにということ、基本の服装は長袖、長ズボンとなっています。しかし、すごく暑くてどうしようもないのに何何でも長袖と長ズボンというよりは、半袖を着て少しでも涼しいほうがいいですね。山の服装はそのときどきに合わせて、自分で判断できなければいけません。

ツアー登山に同行すると参加者の中に「先

生、雨具、着たほうがいいですか」「先生、防寒具着たほうがいいですか」といちいち聞いてくる方がいるのですが、僕は「そのくらのことは自分で考えなさい」と答えています。実際、人によつて体温温度は違ひますので、その人が暑いか寒いかは、こちらでは分らないですから。

——安易に他人に答えを求めるのではなく、まずは自分で考えなさいということですね。

その通りです。例えばストック、つまり山登り用の杖ですが、ダブルストックと言つて2本使えば、両足と合わせて4本足になるから疲れない、とおっしゃる方もいます。

でも、ダブルストックだと両手がふさがつてしまつから、登つているときに木の根っこをつかもうと思つても、つかみようがないじゃないですか。そうになると、どっちがいいのか、選択することになります。

人によつて、ここはダブルストックのほうがベターなのか、それともストックは持たないほうがベターなのかということを考えなければならぬけれども、実際、そういうことを考えられる登山者はまだまだ少ないですね。

山ガールのような若い子の中にはショートパンツの下にタイツを履いて、手にはダブルストックというスタイルをよく見かけますが、私から見れば、まず若い子はストックを持たないほうがいいと思いますね。

——持たないほうがいいんですか？

要するに、必要なのは持たないほうがいいということです。ダブルストックにしたほうがいい方というのも確かにいるんですね。ダブルストックにすると足の負担が少なくなるから、高齢者なんかだと、使わないと逆に足を痛めてしまつて山に登れなくなります。ですが、ダブルストックにすると脚筋力をつかり鍛えられないから、若いうちは使わないうほうがいい。若いうちは脚筋力を鍛えて、年を取つて脚筋力が衰えてきたらストックを使えばいいのだと思います。

ですから、自分でメリット、デメリットを考えて使いましようということになるのです。



岩崎さんご愛用の登山グッズ



自然の中に出てみてほしい。 「道具なんて何でもいから、 とにかく行ってみなさい」

——岩崎さんのお話を伺っていると、本当に山登りしたくなります。

山は素晴らしいですよ。ですから、まずは自然の中に出てみてほしい。「道具なんて何でもいから、とにかく行ってみなさい。高尾山くらいなら、どんな格好して登ったって大丈夫だから」と言いたいですね。特に仕事でストレスを抱えた人にとっては、おすすめしたいです。

——最後に、「自身の夢と今後の活動についてお聞かせください。

よくぞ聞いてくれました（笑）。これは何回しゃべったか分からないな。うちのカメラさんからは「あなたのその話はもう根腐れするわよ」と言われている話を、もう何十年となく言い続けています。

その夢というのは登山小説を書くことです。山岳小説は、例えて言うなら山岳写真集みたいなもので、人がメインになっていないでしょう。目線が普通の読者と同じになっていない。それに対して、僕が出演していたNHKの番組『中高年のための登山学』が人気になったのは、視聴者と同じ目線でやっていたからだと思うのです。みんなに「僕にでも行け

る」私にでも行ける」と思ってもらえたのがよかったみたいです。

僕が目指す登山小説は、あくまでも人を主人公にして、それを軸に山との関係を描いていきたい。表面的にはずっこけるような感じなんだけど、随所にストックの使い方法など山登りに関するノウハウやテクニクが織り込まれていて、1冊読み終えると山登りのことが一通り分かるというのが理想です。

近頃はいよいよ覚悟を決めて「登山小説を書こう！」とパソコンの前に向かうのですが、実際書こうとするとなかなか難しいですね。でも、いつかは登山小説というスタイルで山登りの素晴らしさを伝えたいです。

——登山小説の完成を楽しみにお待ちしております。その他の活動のご予定はいかがでしょう。

僕は再来年70歳で古希を迎えますが、そのときに、みんなでアフリカのキリマンジャロへ行こうということを考えています。キリマンジャロへは僕自身、4回登っているのですが、実行日を再来年の2月と決めて、岩崎の古希記念に「みんなで登ろう、キリマンジャロ」として、計画を立てているところです。

——世界中に数ある山の中で、なぜ、キリ

マンジャロなのですか。

キリマンジャロはゆつくり歩いて登れる山の中で、一番高い山だからです。キリマンジャロの途中のキボハットというところまでは、全然問題なく登れます。頂上付近ではさすがに急になりますが、そこでも岩壁をよじ登るわけではありません。

1500mくらいのところから1000mずつ登っていくのですが、少なくとも最後の山小屋まではそんなに急ではありません。とは言っても高度があるので、やはり高山病になる方が出てきます。ですから、ゆつくり登ることが大切です。無事に戻ってくるのが、山登りで一番大事なことです。

——多岐にわたる山のお話、ありがとうございました。今後、益々のご活躍をお祈りしています。

【インタビュー後記】

昨年は、富士山の世界遺産登録、三浦雄一郎さんのエベレスト最高齢登頂など、日本中が山の話に湧いた年でした。その影響か、登山人口が増え続けています。しかし、山登りは自然が相手です。そこには危険も伴います。山の特性を知り、安全な道具を装備し、準備をしつかりし、自立し、その上で山に登り、山の素晴らしさを知ることが教わりました。

（インタビュー／協会職員 井桁武）

※このインタビューは2013年10月31日に行われたものです。